

共同製作空間の作業時間と会話時間のうつりかわり

: 都立三宅高等学校ファッションショー準備を事例として

東京大学大学院 学際情報学府 博士課程

大西 未希

1. 目的

本報告は、複数人で作業を行う共同製作の空間において、個人での作業時間と周囲と会話する時間がどのようにうつりかわりながらその場が維持されているのか、参加者たちの実践を分析することを目的としている。目的に向けて集う人びとであっても、常に集中して作業をしているわけではない。近くを立ち歩くような気晴らしや、世間話をしながらの作業などの行為が行なわれ、また静かに作業に戻るといったことが繰り返されているこのような行為はいつでもその場に歓迎されるものではなく、その場に相応しい振る舞い方を心得ながら行われている。人びとはその場の主要な活動を切り替える間合いをどのように見計らい、状況を維持し続けているだろうか。

2. 方法

筆者は東京都三宅村にある都立高校、三宅高等学校で年に一度行われる生徒有志のファッションショーの準備教室にて、参与観察を行なった。そのデータをもとにして、E. ゴッフマン (1980) の人びとが状況に参与する活動における分析枠組みを利用して分析した。

3. 結果

共同製作の場面では、個人作業だけではなく、分からないことを教えあったり、話し合いをするといった会話を行わなければ全体の作業が滞ってしまう場面がある。その場にいる全員が製作に集中している状況から会話を行う状況へ移行しやすくなるよう、彼らは関与の状態が安定する「遊び」の状況を作り出し、「遊び」に移行しやすい状況として、集中していないように装い時間をやり過ごしているように見せる「やり過ごし」の状況を理解していることがわかった。集中状況においては、参加者の焦点が各々の作業に向かっているため、製作に関する質問や相談を他者にもちかけることが行われにくい。他者が集中しているために話かけるタイミングを失い、次の作業が進まないといった事態も生んでしまう。その中で怖い話の音読やお菓子を持ち出すような行為は、その場に居合わせた人びと全員がこの場に関与することが求められる状況になることから、席の移動や発話をしやすい状況となる。つまりこれらの合図は、参加者たちが自身の作業にとって有益な行為を行うための間合いをはかりやすいものとなる。

4. 結論

以上の結果から、この場に参与する参加者たち全員にとって作業をすすめやすい場を維持するよう、彼らは状況のうつりかわりが行われることを想定した上で実践し、うつりかわりの合図や、うつりかわりが行われやすい場面を認識するようになっていることが明らかとなった。

文献

Goffman, Erving 1959 *The Presentation of Self in Everyday Life*. 石黒毅 (訳) 『行為と演技—日常生活における自己呈示』誠心書房 1974

Goffman, Erving 1963a *Behavior in Public Places*. 丸木恵祐・本名信行 (訳) 『集まりの構造』誠心書房 1980

Goffman, Erving 1967 *Interaction Ritual: Essays on Face to Face Behavior*. 広瀬英彦・安江孝司 (訳) 『儀礼としての相互行為—対面行動の社会学』法政大学出版局 1986